

関西育種場

関西育種場は岡山県勝央町に所在し、温暖な四国・紀伊半島から、積雪の多い山陰・北陸地方までの19府県を基本区とし、品種開発や遺伝資源の収集・保存を実施しています。

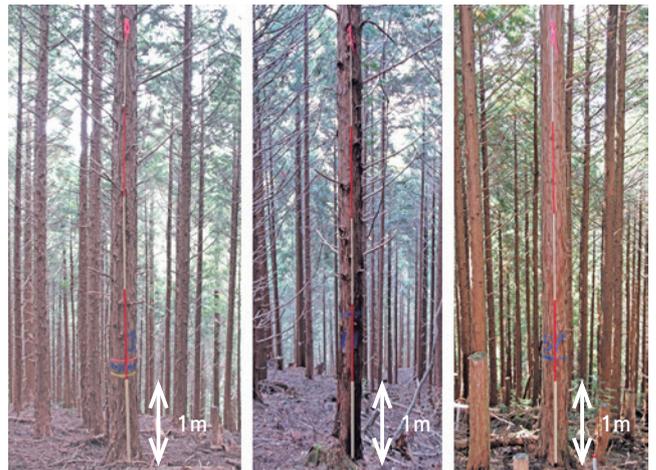
近年、皆伐面積が増加するに伴い、初期成長に優れた苗木が求められるようになってきました。このため、スギ・ヒノキのエリートツリーを開発するとともに、種苗の早期普及を目指し、ヒノキのさし木試験や若齢木の着花促進試験を行っています。当育種基本区におけるヒノキにも、さし木品種として有望な系統があることやミニチュア採種園方式による種子生産の可能性のあることが分かってきました。

また、府県と連携してマツノサイセンチュウ抵抗性アカマツの人工交配家系を育成し、接種検定を進めています。交配家系は、これまでの苗木よりも高い生存率を示し、より高い抵抗性を持つ品種の開発が期待されます。

さらに、紀伊半島と四国東部にのみ生息する絶滅危惧種トガサワラは、平成26年に最近の10年間で最も多い結実が見られ、種子を採取しました。シンバンク事業で保存するとともに、今後、関係機関と連携し、これらを活用した共同研究を計画しています。



ヒノキモデルミニチュア採種園（樹高が1.8m以下のミニチュア採種園（袋はカメムシ被害を防ぐためのもの））



ヒノキエリートツリー（左：15.3m（40年生）、中：16.0m（40年生）、右：13.8m（30年生）（四国森林管理局管内の国有林より選抜））



トガサワラの球果採取（和歌山森林管理署大塔山国有林）



マツノサイセンチュウ接種検定線虫接種作業